

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	ボルフ ヨハンナ
論文担当者	主査 松永 寿人
	副査 新村 健
	副査 中込 隆之
学位論文名	The relation between emotion regulation and migraine; A cross-cultural study on the moderating effect of culture (感情調節と片頭痛との関係：文化による緩和効果に関する異文化間研究)
<p>本研究は、片頭痛における社会文化的要因、あるいは感情調節といった心理的要因の関与を明確とするために、欧米（ドイツ）とアジア（日本）の両文化圏の片頭痛患者を対象に、その頻度や重症度、不安やうつ病、感情調節、生活の質といった心理社会的要因などの比較検討を試みたものである。さらに感情調節と片頭痛症状との関係を調査し、その緩和的役割について文化圏での相違の明確化も目指したものである。</p> <p>本研究の対象者は、片頭痛を有する 18-65 歳の日本人およびドイツ人であり、合計 1131 人が参加した。いずれも頭痛専門施設で加療中のもの、あるいはフライヤーで募集したもので構成され、調査は横断的にオンライン調査プラットフォームを用いて行われた。この中で重篤な精神疾患（うつや摂食障害、不安障害など）の既往があるものは予め対象から除外した。その他回答が不適切な場合も同様に除外し、最終的には 698 人（日本人 261 人、ドイツ人 347 人）を解析の対象とした。調査内容は、頭痛の性状（頻度や強度）に加えて、感情調節尺度（ERQ）、不安尺度（HADS-A）、抑うつ尺度（HDS-D）、頭痛インパクトテスト（HIT-6）、身体症状スケール（SSS-8）、心気症尺度（SHAI）などの質問紙を用いた。</p> <p>その結果、ERQ の下位尺度である「再評価」得点、HADS-D, HIT-6, SSS-8, SHAI などの各尺度得点、さらに頭痛の頻度や強度に、有意な群間差を認めなかった。一方、日本人はドイツ人に比して、ERQ の「感情抑制」得点が有意に高く（3.90 vs 3.51; $p < .01$）、HADS-A 得点が有意に低値（6.97 vs 7.90; $P = .002$）であったが、感情調節と頭痛症状との有意な相関は認められなかった。また文化・民族差は、感情調節と頭痛症状間の相関に影響を与えていなかった。</p> <p>本研究は、欧米とアジアにおける片頭痛症状と感情調節との関連性に関し直接比較した最初の研究である。日本人ではドイツ人に比し、感情抑制が有意に高く、不安が有意に低値であったが、これは人種間での特性の差異、特に感情表現様式、あるいは不安強化様式の相違が反映されている可能性がある。特に本研究では、片頭痛の特性（頻度や強度）に差がなかったことより、片頭痛治療では、このような感情調整、あるいは不安強化様式の民族的・文化的特徴を認識しておくことが重要と考えられた。また感情調整自体は、片頭痛の増悪や維持に影響していなかったため、痛みなど感覚刺激の処理様式を考慮したストレスに対する反応パターンに焦点を当てたアプローチの重要性が示唆された。</p> <p>このように本研究の結果は、片頭痛患者の感情調整などの心理学的特性を比較民族学・文化学的観点から明らかとすると共に、今後の治療アプローチにおける重要な指針を加えるものとして臨床的にも有意義なものであり、本研究は学位論文に値すると判断した。</p>	